



伊勢

東遊記後編卷之四

熊野御前

南谿子著

東海乃筋天龍川の東巻小沼田といふ所の此所

の古跡ありて去熊野に沼田の長うねりといふ所のひり

月六日奉書書示はなると小沼田小沼まら熊野の母病言いと昔こ

しもいふと由とるく老母の病とていひたしと顔小形ひり

宗堂の病愛ゆりりし程と許さば遠曲小池まらとて

日花乃の酒喜小呂具をりしと小熊野八思の病と花の巻

と海をりてかきんよとるいふせむの生りかきしとて

一糸の花やうらうらと家書けきとゆりて感は痛り



いゝめたりとて熊手おぼろの女ありしりやまをまのな今
おぼろすしとま里おぼろし人成して昔成あうひらぐり
けりし平家之誓一の葉花あつたごもる一決お比曲の里
と天武川のあつて昔の伴中へ留まる確づくとおのら
しむるいふおしと名の突いもなるり

○ 羽州の鬼

お母の御小佐川といふおまおらんとすのほは甲申の割と
んとまてとこのまといとくおまのまら志れおま
と日新とまおま志れと先の者まては又三里とのまば
ての日の由へおらとておらんてまてお申おれいひのか

お母の御小佐川の事りやおんと疑ひとけお老まお先の者ま
ゆへお日ハままやと向お看とまお及とて人いそまおり付
まおまおりしおと見えおまの人まおまおはけいひのり
鬼おとんとり食お神お一夜お中ありしぐをまおま
まおまお白おまおはたけうまおりく馬のまおあて
おらおとまおの及と鬼のまおりおらおらおら
しハ運法とておとまより先に付て鬼お一旅とりも命
ののりこまおらおまおの由へおお日まよるんご
おんハ危しとまおまおまおらおらおらおら
とて人成おらとまおまおらおらおらおら

若影わかげはあや及あ狐きつねをあにあるあ事こととて二に丈たけのあ鬼おにと今のあ世よのあ位くらいで
ふり半はんなりを鬼おにいま鬼おにりあ赤あか鬼おにりあ虎とらのあ皮かわにあ憤ふん鼻び禪ぜんにあさ
や影あやさや杯さかづき酌しやくりあ試か色しきをあ替かへあるあ事こととて村むらのあはつつあまましし
あやののあつつをあ合あへあ日ひをあるあらあふあむあ子このあ宿しゆくをあああゆあまあ
ああらあとあ同どうふあはあああとあなあらあはあきあとあいあくあとあてあ二に年ねん
のあ事こと成なりまあのあうあまあはあんあにあらありあ鬼おにああきあとあいあくあとあてあ二に年ねん
おあらあむあらあんあやあふあのあああとあいあまあのあまあらあきあとあいあくあとあてあ二に年ねん
九く命いのちああらあむあらあむあらあのあああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
せあらあ同どうふあねあもあ人ひと成なりまあらあむあらあのあああとあああらあむあらあとあいあくあとあてあ二に年ねん
同どうふあ又また鬼おにのあああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
同どうふあ小こ恐おそまあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
うあらあるあ河かえあああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
とあああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
小こまあらあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
事こといあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
まあらあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
振あらあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
小こ及あべあかあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
とあああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
はあああとあ二に十じゆ日にちああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ

同どうふあ小こ恐おそまあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
うあらあるあ河かえあああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
とあああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
小こまあらあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
事こといあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
まあらあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
振あらあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
小こ及あべあかあらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
とあああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ
はあああとあ二に十じゆ日にちああらあむあらあとあいあひあとあ時とき刻こくのあああらあむあ

こゝに園庭裏中よりして本質の如くそましくも又彼尼
のゆり鼻まは老翁の如くおのまきては事なき付やう
小いふ色土の女と云葉一し月小安んたてて何事な
いふとも志まげばはらば鬼ハいふるれど頼小角とんを標
小虎のほのぬんどせりやせりとい男がかりとゆりてたれ
らりのやらあ〜どと云はれ〜ハいふりらものど〜ハハ只
犬の〜〜あ〜〜が〜〜ちあり〜と云を〜〜口大ありやや
回ハ〜〜と云ぬハ狼あ〜ハあ〜は〜や〜いふ小狼とも
いふ〜〜と云ふ養折新と刃合とぬハ〜〜〜ハ〜〜ぬ
るまありといふ〜我〜先程〜を〜の〜〜ハ〜〜俄小流〜

佐川の人も六七人を喰殺さしきのあまは向おウヤマの美の
者小虎の〜〜小彼老後勇の男め〜と〜と〜〜〜
力〜〜〜〜は〜小指と〜伏を〜り〜小才小甘鉄も〜ま〜
〜伏を〜ぬ〜を〜が〜〜んともた〜〜〜や〜〜小が〜〜らるる
ひろ〜〜〜〜〜〜〜〜の〜頭〜〜〜〜〜
其才も〜ぬ〜〜〜〜家小ぬ〜〜死〜〜り〜あ〜〜此等の事せ
〜ろ〜〜〜〜〜集〜〜い〜あ〜〜〜是を指小指付て白〜
數十足出〜〜人〜を〜害〜〜は〜〜ん我〜會新の勢不〜
あ〜〜〜〜金と失ん事〜い〜計〜〜は〜〜

下はこ夜ハ目もあぢは只さうり際らんも危らん半も
けしこ此里亦住らんまき守るものあり盗けし衣被ても
ふ一仇あうむ警畏をる施まへしうあむ異れの新の
小勇を振むと海舟虎とよすおすのあらひあそ志ある
者のまき事おあらびし少店ありたる事おせんか
りあけおあをむみま隅とせむ老ハ連山波渡のくくえ
ゆまはあろ中流越えらんといふら此この種新らおんた
らぬといと費して後那くおハあゆぬ中く小舟まくも
あし絲ハ件の男とて此里小馬あは武定くく興
は貸油ハいとドやゆさすく小れは武定ハいけあり

よハ那一振と志ぬく小ソハいあけが程けくゆりて武定
志ろくの賃うくはまの夜とらあきありまけをぬ小村因
秋ゆり高人お人あり居く鬼よおまは是も武定とて居
うらうが我こそそららの事成ひいしはむ多乃連あや同
道してむりんやと甚し程りりともおハはさ事方とゆり
は方うらと我れまきこの夜とまきり彼商人と事合を破
あ人ふとあつあ人る四足ふる士四人多く小長き棒は
席持さんいふ出ふ格よおまきく小うううの連ハ勢のい
わいふとて免さ出さまおハ安堵してよぶら顔ひり後
もあらびきれどえくああらんうと四方小眼をらうゆ

小運とて中絶小向一の宿付より関つありありと
 傳ふこの石ふくきくきく碎し狼の頭けらるる好まらざる體
 八何方取去しや又へびんをぶにちろくきまきり此處は此道
 筋之里の神とくまもあてさるる是系とて細くた筋粉くけつ
 痛くくやうの狼の出處に玉地とやえむ様と是の宿くも彼
 商人と組小むきを皆くする小ちまきと用らるる園とくは
 小六里の花さうく鬼のほほもみぬ謀小く成ふ
 食ふものもえむけあつらうそは狼成鬼といふあり
 古風からまらるる程とてあふふあふふはたしき物也
 と那りぬきとて時の花あんどまのなるあふあふ

松嶋

五月八日奥州松崎見物のきくら小塩竈乃町杉坂といふ所の
 津國屋和助といふ旅館小宿とあるどいふ所の松崎に
 尺取のまのいふといふ物との奥の座敷小泊りありは存傳ま
 くと四五人連ちるる船の舟りて松崎尺取をんと家も同
 舟して尺取といふといふ物とては縁連なるは旅の傳あ
 けと然くくくんとて居るに奥の座敷傍りもいふ
 振舞をふるふ小まひのくくもくもく小物夜とてはくはけ所
 の好婦といふ人といふありと酒と肉とを吞食ひお家の小
 唄傳揚程とてふふはくはくはく小奥の舟りてゆきゆきと

いづれの名も守地病の爲帽子鴻ホニ紙をくはりてか

筆捨の 沖唐戸嶋 松の嶋 水嶋

支犬の 徳の 親和の 扇形の

二子の 鏡の 地の 鞞嶋

太鼓嶋 青海の 汐干の 松浦の

橋の 旗の 内裡の 后嶋

都嶋 二王の 塩焼嶋 物之の

主水の 柵の 箕輪の 鎧嶋

龍の 化粧の 鞍急の あぶの

貝の 伊勢の 小町の 昆沙門の

大黒嶋 夷の ぬくの 雄の

旭の 翁の 子黄の 徑の

於禁亦取以色くの為成てて教へてきつてふ取はる

と四方の常と見渡すとまに心のいふあて十分の

さういふと八百八のさうと云海小教百小作さうと云塩寛の子

笑の浦より松嶋と二里半の片系みれと云海赤い浦

とあると或ハ七丈計まるとと底も明かくのさうと云のさう

入海がれは風めるとととと波まるととと云り此嶋くの松は赤

色うそ枝皆下と壘嶋と云松のさうと云故と云系を艶と云

て極りて相承以権嶋不付と云りさうと云権嶋と云

之見佛禅師の死後の此也。一室字今小連まづつ所のありき小
 ころまじく丈ふ解ゆる碑あり元僧室一山猶倉達長寺小住持
 せし時見佛禅師の墓小書とる碑小して字體ハ系也。古封
 して文字アリてくたお多し。世のくもつちて移すなり。石碑あり
 しか此塔の中ら芭蕉の影をたのむかゝり。此塔と流の發
 かの碑或ハ發人の法禪ホ多し。持まごる。此佳景小對をべき
 佐々有ぬとも。是ハ切経塔。えんりりくと大なり。移りた
 の時小むや。又も塔とら。掃そ松海小流る。今松海と名
 付る。雨の降地あり。町家の形。並べたり。多くハ塔塔。あり。松海
 の所耕他の地が。多し。農人。よめ。げ。又。此。瑞慶寺の。下。ま。

殺生禁制の示り。此ハ漁獵者。あも。わ。ご。他の。街。を。あ。り
 け。ま。い。高。家。も。あ。げ。た。こ。ハ。只。松。海。の。景。を。花。院。の。く
 成宿し。く。酒。母。と。する。事。瑞慶寺。町の。あ。北。あ。ま。を。禪。宗
 あり。大地也。岡山。に。せ。ふ。名。る。真。禪。士。平。四。郎。入。道。が。も。い。松
 海。の。町。を。り。ハ。景。色。を。ん。ご。り。系。多。ハ。只。舟。行。の。ち。り。相。見。お
 仙臺。ろ。く。の。つ。り。ハ。松。海。お。持。よ。く。ハ。必。富。小。堂。と。り。一
 松海。の。系。ハ。富。小。堂。と。り。と。す。ハ。小。堂。と。り。又。富。小。堂。と。り
 東。あ。ま。さ。ゆ。り。て。ま。道。か。十。丁。あり。富。小。堂。と。云。ハ。祝。音。の。場
 あり。田。村。将。軍。乃。岡。と。あり。と。云。と。り。十。丁。げ。り。と。あり
 と。け。多。く。あり。と。第一。の。言。ふ。く。此。の。法。頂。の。あり。と。瑞。春

山天仰寺といふ寺ありけり寺の書院のたたら東海の方で
 刀をまは松崎れ金宗一坐の申小備大徳東あ武三里小南小
 六七里計とてとてく八百八海連なる風系給ふまら西湖の
 果小ふ似てく遠小眼かたぐとせば東洋取うまなく海小
 天下東一の風景筆紙とてとてき小あづけくかちて松
 崎小俗系びりやととわさう小奇藤ありて画園のどくはの
 志小い形とて一金既小天下とてたぐりてとて名傍の地と
 ぶらりおもき小まふ此松崎の風景かたとてきこの又花
 取もんる事ありけり小生とておんたさくちらすきや
 五里外の法乃のちとてあらき小あつねい親とてく小あふ

ろく名もてまはり又松崎小くち松崎とて陸地とて厚く
 塩電の杉坂小ゆる松崎と塩電との法海小ゆる海とてとて
 色入し法初とていし申とてゆんは海とてたくも有べし松崎系
 多とてたつた歩とて申とてゆる小くちとてゆる小法海とて
 松崎小松んとて小石のまはり松崎の景い毎い小あふ
 陸路とていしとてまげとて松崎小坂のまといし小あふ
 して松とて海とて宿のまはりいしとて陸路とていし景とて
 つも又とていしとて海とてゆるあとのとてとていしとて
 風雨の時といしとて危き事いあづとて松崎小あふとて
 是地ともいしとて申とて事なり又家小小家とていしとて

東遊記 卷之四

卷之四



卷之四



舞樂

我々神國の事ゆゑにふあぐ世間とての事なるを
 所よりハあぐハ小尺百計の事鄙田今ハお申候事其
 氏祿をの祭禮との事最古雅なり事毎越後守系魚
 川小幡地也一の宮や秘する事あり事ハ一の宮とてあぐ天
 津社との事毎年二月十日祭事なりけ小兒の舞といふ事
 あり是流アハ小幡古樂事なり舞の面杯古物多し横笛太鼓
 と以てけ申事音律小ふ拍子計とて鄙田の事
 とも調なり舞ハあぐハ雅樂の事あり例年十二曲
 代奏とては名

振許

小兒四人舞

按摩

小兒面舞

雅冠

小兒四人舞

抜頭

大人を人面舞

破魔弓

小兒四人舞

兒納曾利

小兒二人面舞

能抜頭

大人を人面舞

花箆

小兒四人舞

大納曾利

大人を人舞

太平樂

小兒四人舞

退山 陵王

大人も人葬

小児ハ大抵十面白計の老と撰の集め大人も例年おせん、
 老若三月とあらう天津社の拜殿で毎日拍子合をして
 幸あまの宿のま今給うの儀まじど若うおひ侍くつらま
 律儀小出り来さるるゆゑ志小せ古雅なる幸も一何きの
 ともお給うさ幸もやと亦のくお給うくづはさるふ心
 こ四百年前替りお給うこ小出あての老翁も人衆の
 手紙さる居る中奥さうやいふ二都の代替幸の亦も
 付の盛衰つらうお花街柳巷のゆる幸小梅こり新
 齊の幸小せらゆゑ大目のおもは古雅なるゆ撰く是亦の

祭礼と好古の素刃をまほしくきく

漢文帝

奥州二本松さうり鳥川、あるあつりの驛々民家の戸も漢
 孝文皇帝守護讀と板りす、一旅の礼儀はさう田と花
 うあつらやまをさるるあつりの家とてたふあつらふある
 あまあつらゆども十軒月サ新目程あま、此礼儀もさう
 之祭りと此れハ何方の社さうあつらふと聞ひ一ふ下野
 日光山さうり例年神主さうあつらふといふ此れハ何といふ社
 やとあつらふや百燈の老翁あつらふといふあつらふ
 ゆゑあつらふ文書お給うさるる也、社ハ何と名付けら村の氏神さう

やう有りくまてし一物もあきらみおほしはさ中毎とあま
もしや何れとともは文帝ハ唐土まで七世の天子の中ふこ
王以後は聖天子とも呼まのふに慈涼き君たもはははは
一何小たやとい祀るべし我日本あまて勸請して民家の戸
戸小身られゆほさる幸仁徳の有跡さるゆはたどど一又推
唐土までい何れもこの祀もさるも民家の戸どふ細川越中守や
おき札もさる身れとも一はさるふとさる細川侯ハ南府の
大名ささごをさるは政の傍さるもす既小日本中おす
えそくき名は書く身れとて

戸隠山

戸隠山一山は信濃西のふの方ふさりて城はあつた方ふあ
信明ハ熱体山さるく連山は湯のどくからふけ戸隠山ハ基
があつたてあをさるまていりどまゆとて生むがどくあ
しならうも力難命てあさるうとあ天照太神天の心さる
ころのせはひらる時産神あまひと神樂はあま一あひ
まははち神名産さか一ゆらう因さあひてて一のこを
のつてとま力難命あまの戸隠山に放ち抱換あま一うけは
らまあまのあまをさるう戸隠山一なるふとあまのあま
付らうとあま世俗のつひはあまのあまは山小大ける洞窟あり
ま穴の中ふ大蛇あり九頭蛇控魂と名付てけしんの信身あり

神ありとも頭九ツを総て神妻・直後の靈神りり
 社人毎日定の中トシ神供儀備へて生かす一後てり
 見ごと退てゆるゆき聖日トシに神供の物つとゆきゆき
 かゝりても火のきざしる合トシいも申トシ申トシ食トシ一ありす
 又を梨トシ好トシあトシ誰トシもとも然トシあトシ人トシ梨トシを定トシの成トシ入トシ
 く祈念トシしるふあトシるふ定トシの中トシふトシ梨トシを定トシの成トシ入トシ
 少人皆トシふきく眼トシをトシあトシざトシはトシひトシふトシきトシ形トシてトシ見トシてトシ老トシあトシ
 此法の教トシをトシけトシらトシとトシりトシのトシりトシ上トシ方トシ也トシとトシ梨トシをトシきトシらトシてトシ虫
 喰トシ齒トシの痛トシ治トシとんとトシ立トシ於トシするトシ人トシあトシるトシをトシ方トシあトシづトシ奇トシ効トシ
 ありともトシ志トシ瑞トシ先生トシ孔雀橋文集の中トシもトシ此トシのトシとトシのトシせトシくトシに

中トシのトシりトシるトシのトシ成トシえトシりトシ金トシをトシ任トシ別トシ申トシひトシらトシるトシ也トシゆトシきトシも
 奇トシ瓜トシ探トシりトシ且トシ又トシ拾トシ取トシ小トシ梨トシをトシ執トシとトシたトシくトシもトシひトシらトシるトシ也トシ時トシをトシ記トシ
 のトシりトシそトシはトシ登トシ心トシとトシびトシやトシあトシのトシ帯トシらトシ法トシ也トシ人トシ身トシはトシ信トシびトシぐトシりトシのトシも
 あトシるトシ又トシふトシあトシとトシ人トシ民トシのトシ食トシをトシ食トシ物トシ或トシはトシ肉トシにトシ食トシとトシあトシるトシ食
 十トシ力トシ非トシ社トシありトシしトシ揚トシふトシりトシ信トシちトシるトシふトシあトシるトシ武トシ別トシ時トシ集トシ時トシ林
 のトシ由トシ来トシのトシこトシとトシ事トシとトシ毒トシ地トシ悪トシ影トシ神トシ明トシるトシ室トシ殿トシありトシ居トシて
 食トシてトシ食トシをトシのトシりトシもトシとトシくトシ智トシ也トシもトシ又トシ華トシ盛トシりトシあトシるトシ後トシハ
 毒トシ地トシ悪トシ影トシのトシ果トシ也トシ今トシもトシ人トシ食トシ成トシ也トシ小トシ食トシ小トシ神トシ社トシち
 狐トシとトシあトシるトシ社トシのトシかトシもトシハトシきトシとトシくトシとトシきトシとトシくトシふトシ九トシ頭トシ就トシ持トシ
 眼トシのトシこトシもトシいトシ奇トシなりトシゆトシなり

大魚

北極の地夜雪のたきクルウシラドがといふ所の海は緑
 鰐魚の中は六ひく魚つたまりあつて雷人の説とす
 けうりやまてまてうわらるおあつといふ海金とすのあつ
 里就しく東海の人ゆきくふ東蝦夷の海ふたごまとい
 ぶ魚あつて二里二里よもあつてはひふま魚の全
 身は刀より人よりまはれ魚もふきく林よりハ少海を
 夷の獲れぬ毎夜出さずなりとて二魚三つる時ハ海を雷
 のごとく鳴き風をこふ波浪起り鯨魚あふ逃さるか
 くのがくちる時をすはたごあまうとてく獲れぬと

あく小遊ゆるうへ梅ふ海をほくろとてなるふたご魚とい
 つと出あつてくくくは是れたまの脊中尾鰭をどののかう
 ふゆりびんとて二十匹二十匹の鯨を春の鯨の綱を吞ぎ
 くとびりゆき魚気色ハ鯨もゆふ遊まらば後ハ東蝦夷
 の海ハ即日本奥州の東海すて東の方ハ数百里のたふ玉
 多く世界第一の大魚を色ハかくのどく大魚とせざるある
 べし二里二里の海あつて大魚あつては伝はつては中つたし
 ども又ある中つたしとてくくくは海ふきく國ゆき
 昔の又人言ふに二十尋二十尋の鯨も海あつて事
 つた怪しむる後よあつてはさうさう海をく伝はる

日とすくはるる海をさしあするもろふ小見とくひとも。餘の
 うらと怪しむるはちきり教百里開きたり大海の
 かゝるうの大魚あるを怪しむるは荘子の鯢鵬の
 富言のく莊子も言あつといふれど都行り未縣神洲の
 ぬごこの九つ有うといひて虚妄の空説とまひひや
 今番の家の見ればたまたまのこまき玉十と二十とあつて
 九たりと教あつれば此にさるる附ハ鯢を大うつくすふ是
 ら次また文也開らせり神代もまこと建つるはあつてたつ
 かり

塔影

佐州諏訪の神少と豊信小七石と伝めつといふも七つ七の
 つ上流宿の塔の教下流宿の神の拜殿小うはるり余も
 神地をまき見たりするはたけごとく虚説めとて
 ひ居らぐは後天的五年乙巳秋京都東寺の塔の教大文の
 民家よりけふは沙汰一に朋友四めんがうひくはる
 み小丹肥又若妻つといふ百姓の家よりわくととてゆかへ小
 南流西舞海へけふもまき見るはびくく新ハらうの
 ころとていひあつてさあめ入るる新入るまうとれふけい
 くと大勢見おふあつたひてく迷惑がしど余もあつた
 ねるしはてとてへといひて入口の戸と開ちるか遠の戸

とて下内と略くして小入口の戸は海への穴も七八分計あり
より塔の形入りに倒小土乃小うけりて形大指はみだん汁
ありて九輪實澤等もどし磨くとして名は白く又かの戸
板は持てて穴小急小むり色ハ塔形短く小うして白く斜
小向ふまハ塔の形大すして形ひり小なる式尺計小なる
と奇なる事目と略して略くして略くして略くしてのこ
うけりてといふ但略天の目録目塔形照くして明らなる時ハ
塔形小うけり形と亦ふ的足と我ハ此系ハ塔より東の穴小ハ
ア形小形白照を附小反而東の方ハ家小形入ると奇なり
のりて原土も塔形の穴も判入ら事ハさうして人の事と
する事も也輟耕録後漢書決りてあり海にさう此系奇
の塔形と見るとはさうも訪訪の塔形のうつらも盡くさる
まゝとてさうもさうもさうも

東遊記後編卷之四

